

近年、外界からの環境的諸刺激を感知統合したうえで身体運動を連鎖的にかつ運動学習的に考える認知運動療法が関心を集めている。しかし認知運動療法を実施するにあたっては、その理論的背景を確認するとともに中枢神経疾患、整形外科疾患などに対するアプローチ法をいかに適応するかの判断基準、また臨床的な効果とその限界を理解したうえで臨床対応することが重要である。本特集では、認知運動療法の取り組むべき課題を明らかにして、多くの理学療法士が臨床的検証を積み重ね、認知運動療法がより進化する契機となることを願っている。

■認知運動療法の適応と限界（池田耕治，他論文）

認知運動療法は、イタリアの神経科学者 Carlo C Perfetti 教授により提唱された認知理論に基づく新しい考えの運動療法である。脳機能の再組織化からの運動機能回復を目的にしており、認知過程（知覚、注意、記憶、判断、言語）を活性化させる認知課題を構築し、患者に関わっていく。ここでは、認知運動療法の定義、基本概念を概観し、その適応と限界について考える。そして最近の動向としてイタリアで展開している「認知を生きる」プロジェクトについて述べる。

■認知運動療法の基礎科学（森岡 周論文）

認知運動療法の背景にある脳・認知神経科学の知見について、特に感覚野と運動野の身体地図の可塑的变化機構、運動前野と補足運動野における運動学習の神経生理学的機構、小脳の運動学習機構、認知器官としての小脳の役割、頭頂連合野における空間認知と身体イメージの生成、そして、運動イメージによる大脳皮質の活性化について論述した。また、脳科学の究極の目標である意識を探るための内部・外部観察、一人称・三人称記述について説明した。

■骨関節疾患に対する認知運動療法（沖田一彦論文）

骨関節疾患に対する認知運動療法では、運動器のもつ「情報器官」としての機能が重視される。損傷や廃用でその機能が低下したとき、運動命令を出す中枢神経系に何が起こり、運動戦略がどう変化するかが問題にされる。この考えに基づく治療の構造的な、肩に対して考案された課題を例に解説した。従来の理学療法アプローチで解決できない骨関節疾患の諸問題を、この観点からの介入を通して説明・解決していくことが望まれる。

■脳卒中片麻痺に対する認知運動療法（富永孝紀，他論文）

脳卒中片麻痺患者の病態を理解するためには、患者自身が、損傷を受けた身体をどのように意識し、治療という経験をどのように思考しているのか、内省を引き出すことが重要である。このような意識経験を通じて初めて患者は自己の欠損を洞察する力を培うことができる。認知運動療法は、循環的な対話形式をとりながら患者の誤った認知に介入し、機能回復を導くためのリハビリテーションである。本稿では、著明な運動麻痺、および高次機能障害を呈した2症例を呈示し、臨床現場における認知運動療法の具体的な進め方について概説する。

■全身性エリテマトーデスに片麻痺を合併した症例に対する認知運動療法（石原崇史，他論文）

全身性エリテマトーデスから右片麻痺を合併した患者に対して認知運動療法を行った。立脚期の終期から遊脚期の中期までの麻痺側下肢の動きの障害には身体表象の変容・欠如という問題を有していた。この問題をどう克服し、麻痺側下肢の振り出しをどのように学習させたかに焦点をあて、問題・仮説・検証の認識論的視点に基づき実施した認知運動療法の妥当性を検証した。今回、言語を治療的道具として用いた治療場面の認知運動療法の実例を紹介する。

■整形外科疾患に対して認知運動療法を実施した一症例（荻野 敏論文）

整形外科疾患患者に対する認知運動療法では、運動器を単なる「実行器官」や「力学器官」として捉えるのではなく、自らの身体に関する情報を中枢に伝える「情報器官」とであると認識し、その特異的病理の視点から考察を加えることが重要である。本稿では、整形外科疾患に対して認知運動療法を実施した一症例に着目し、認知運動療法を実践する上での思考過程を紹介する。